かうぶつしう

下

十三

かうぶんきやう下

第三かういをたもちてほとけになるへしと申しハ
によらいハきんかいにいるゝぬまても八まん四せんの
あくごうぼんなうふはめくれのせハおこりきたると
いへともまつくおうさふらうなしぼんまう
きやうにはかいをたもつ人ハこしやうとめんてんの
ほうとうくはときゝこしやうしつろんにはかいとさ
りきミをのハりうくのきんこんこやうしゆう
をすとえるしへさわ智度論にはりしうと大せん
ほんをもとめんとおもハゝまさりうかいをさきの
へしとあかすりつにはうかいをたもつ人を

戒とたりとさかりのハ地獄畜の報を人天とまかり又

二十五乃ぜんじんおうごし給ふといへりこのゆへに
よくたもちたまふるをぜんとすといひこれをやぶるをば
あくとすなはちいはれあはれきわまりなきぼさつかい
またしやみかいはいはさつまた八万四千さい三千の
ぬきなとをはまくおかされとも仏のかい大望
のうばそくはすかいをたもちしへたいのちやうちやが
ためは五かいをさづけ給ふ仏ゆへまつるかいは
あはれまをたつへし五かいとや八せつしやうちう
たうじやいんまうごおんじゆ也これなわ第一ふせつをい
しやうとやしれそのいのちをとらぬ事なり
せつれのいんをいのゑんせつれごうといふはころすか

らうはすのこはわれすくもうしはすまもとももふかす
人は殺しへくをころさをすは是ハおもくいればびく里
ふいそくふいしきさするはあはたるくわ乃もと
へゆきけるれむはくわうちへいまするひまあかと
いふとも殺わてむとのゑぬたゝはくまあくわられ
僧乃ぬすみいるとそうちせあられとも世間志やう
うい善やぶらしとそとはれのそうるといふされ
ハいよくうたんとおるふりふつちぬけくうのもわ
ふあるわて死るを見て僧のおひぬいのふたいへ
ハ僧是ぬいきうゐはましきりとえハりしうくる
けぬいく性事なしといひなる時さうハこのもか

れうしをあけてみよたちあるやしといへハことよわ
のえたるたましひ飛ハあわけるそれ時たち行くつきに
僧みむうひなふきて住しとくおほせなくてゆへ
ふきせめとうけまうふうといへハやまをいまや
うハをたりて床ゆへかいしきなわといひそれハ
その時たち律くまに住そうをらいはいしてふうとく
けりこのすてんたいよう乾脱へふなわえもし
うくるふまりんうふうき羅うんをしやうし
きたせんとて世うへ終ふおわかしごをうちてまち
たまふ所ゆらうん来わまうふよしやうれハうつご
ふあるへき所あわうれハおくへ入てうつきれとれ

経ふとらうんのすとおりひらうんにんするふち
らうんれひをまわなまみりとこうちそて経そら
かんをうれへよひなれとおほせられけるときや
歳きとれすゆひわるほとにまわぬとやせハみうと
き事とかゆしとおさまりくおそ流しく都ふ
しめして佛乃清まの人よ条至経ひてちんけむ経ん
ハゆとけ乃たちそくえりとさ乾れ志やうう人は
まて田れ中うましく名ゆ時らうんハてん妙
まそ田をほく床ひとれすきといふ物まそしんふう流
あく乃乃くびとうちまわぬてん妙くぬうまめしめ世
うひなくしをやとぬされハい梅こうと行くさん

さあふんふしんしゆさふてなわとのたまへるあや
まちさん かくのよしめめんやんとして讃さん
むくひうをひとをやむしやうしやうじふつの
つゆやくふされし六ぢやふまんあしそのふしむは
えめくいのちをしゆしせつしやうかいをたつさ
ゆましゆんなりとそなとけハときま給ふ御まへの道す
くえめくいのちをふる事なかれ　二まふちう
たうかいとハしハ草れ一すちもりるをれ一ふんを
ぬすにえる称すしてと新へるすゆえんやえりの
のえめとやむしけうおんもたいてすゆきまみち
れおかふわくりおちるあまとるまふわしゆんに

また首をやうれかのさうしれのくちとなわかきされ
いほとけれ物をぬすまうるえのハえやうへせつ
にてのふきえのりむまなくあるとくろのはハりるま
まそりくへ人をぬすみにてもつはふかきんしやうと
えやうおさましきるりあわされハうしともむとハ
又此あうふ他物も事にふわてもうすうとふぬし
縁しむえのなとをゆめあくとるへうふすまた云うく
此ぬすえとふすりあわ一かはすゐつれ物をぬて
ほしきとおりふ二にはあとれかるわつたしまる
物をとまてかしとおりふ三にはえのくかとの家かし
とあもひ四にはえるとにをのるあちえひとわせなし

うわ五りハ男はぬすくそのはあひおやくをあし
てかしゑおりふ六かはんみり物あんじておりひ
いろうしてかしと思ふられみふまん志れさうなわ
よくはくしてしやうしとも家殺たまのふへし
第三にふたやいんとゆハはまあはそめとわとこ母
をすかのとあふ女と浮海ふすへうすと心底志め
られうるなわされともられハひとわをへゆる浮迷
てれいふりもおわそかなわされいみゆんまて佛
れをしへ小われふれうるへぬをもやられ女人
ハおんかふのみふおこなわかとふひれの翁ハ五百
しやうれおひさう迷母志てさうひと六道めよ里ん忠

すとくしやとはえゐるとも女人をハえゐるへしうすと
いろわされバきやうかも一こひにはゆんとこん本
かなうく三途れこうをもはぬいりん一こひおりし
ぬまても世るんえりおつるすきうちやうなわとくそ
のへられるふむし一人れ雅うんみちとわ孫ふ
は体ゑるさりうすれぬふるとゆへそわくひてと誠
ほたまふてしあやまちてゆんをとひなるふらうん
れのそくかま五百世れあとうえうくまてあかし時
いんとかしを一人の子をまふけく六ゆうう孩る
ともめきやうれこめりいてんと志けきハゆ迷
きんいり小ふ殺とわりひをゆきまうふうといひて

かしよとかつきてふきさけひしるしこそ時のこゑハ
とくまわぬそれゆへうし由りやのちう念んなく
しゝ五百しやうのあひ六由ふあんかして氏よひ
うちやうしくらうれ乃くハをかゝれむし乃ゆへ
みハするいち氏うすなわちそのたすひけるこれ（今ふ輪田と云ふ所也）
いゆんよくろい一乃仏たう乃ちまさけなる孫てん
きやうは女人地獄しのふたんぶつしゆしを
めんいおさつふい志んによやこやとのへたまへわ
ほんいおんぶはぢうくのつひまそすくほときれ
らねせふつうちハ菩薩うしにさわとりへらもん
れうちハおふれとしときたまふあわしよ

さあふふやあゆく大王れきさきハまう子れくおう
たいしをおりひうけたすひられれよのかさけ里
とおりしめし法のよきいまたまもされハあまりん
とくあうおんへのしのこあうれとし給れおいと
とあれかとこふし給さするおんふうんかえんてうま
うれをおうすみちくしやうふとむつくそのもあわ覚
みあいんよく法のす所なわよくくしく法しこ
まうふへし志う道れざい在家のゆは一人なれ
ゆあしたのへるなれされれいいけんれかのふ
月ハ法うれとしるくいまあめられうあんにふれ
ちきわしうそまなふ乃忠きあふらんや系すみやうふ

りんよくをもつはらにしてむじやうなれハないしんをおこし
ふつたうを孫のひまこにつたへさきなわ
みふおんじゆと申ハさけをのむまじき事なり
されハてんぢくにちやうじやあり一れ茲乃うち
うさけをのくまはれ大みしてのめのすいつ
これこそちやうしやれにそうくるみいまて
ちのうめをみまいハわつくうつくしき女あわりそき
あくわて老むりむかふてふんらをたのみてかい
らふとう堂のちまわ行さうすゞりの硯母ま給ふ
心をり出かくしへとあひしてのめれうちうりか
くりき給をうかいせんそうわ事あらんとひひかれ

ちやうしやおもひうるさ家にすまきり
思ひいそ我れりてみまハおんなふわうすれとも
身るなおさこなわさそハま給をすりしれてほ
男りし候さきんこくみなわうそをとし候ハ女を
好くうしれ室へ内へ志るるを一人の姪ん此事
をさとりてさけれハうめをのる小男と指んふも
されハあけくれ酒をあひしてぬ身のほ中ん子ことに
ちやうしてなんしやうをうしおひふくなえされて
わりのけれうほるをさつすれハらうんそのさう
つかさとりめいりうちりまてちやうとやふす好に
みせたまへハたりひのうしみやこぬみかせうみん

おや此僧ハ一人のうゑうくあまさけのみあひて
か心をうしなふゆへうん死めをおかしきつく
庭にわとりをぬすみてころしけるゆへこれをきりて
かのちけ道ハちんしあさましぬ俗道ハうやうふ
うんしやうとうしふはさるゆへ五つの戒をやふる
そのなかにもさけハゆるさきやうふかくせの
らんくいのミごとにあくゆいをぬぐうんだんふしき
悪口悪意とんハおとくちとんとミこうとりへ
これこうおほく流はもとうはそさけをとりて
とんかんとすりはうゆへ入れまんして悪在を
此の道よと尽きたまふなわみかんまふきやうは

さけと飲く人ハあるへからんその九百世此かの
ても身のにむまれとの人経へわいりんやうろ
うられまんふをひてもろ〳〵すくはく意と佛う
おわたまふへし
五ふまふごうといとすりてうの事とすへうすに
此とくこやおをはえまされはちきいのちをある
といふそうちとめとゆめまるなわされハちうく
まそ飯入りむけてくうの此いもくまふこれ
次ハ大うハなもやき〳〵へしましてきみそやうん
すうハ其ぬの家の道野りひと往をたらんのこ
とし地獄此ミき來ハするにちはうごなわされて

ことにこれ法をおちつくるそのあと綺語のすぢハ
うたをよミすさふくハせうことやへしむかしさハ
式部そらことをもつて源氏物かたりをつくりし
ゆへにおちてくるしミおちてくるしミをうくるはやく源氏
やきすてゝ一日経をかきとふらへしと人民夢
にみえけるとぞ。しかるにもあつまりてとふらひ
しなわたしんハうわ部と法志りを見うしなひて
うへを麻やと綺望法るといへとんまゝとて旅さし
うちあふ志がわふかうこ志ろすといふをは殊うこ不飛
ともおとしけもゆるし給ふへしをそうられみにて
すれくるしうすそれなりのれまふで寄しほとの

まふことなわともしゆるとそれてそうくるへし
されハ恩志ん乃儒部ハとしうふかふきん法門
れきやうりふとおうことまふとちあまねんよう乃
阿母とや人のおやもろてきさハかくれふきみ心
しやなわなふれゆへ不葬しうふおかやをれり
家をみたまふうこそのたりひきれハむしして大うい
のちしろまよわい施すせん乃くるひにむまれ路ひ
けるまなつりしけまハみなるなわされハ大臣
くきやうよわりしめそれやしきうりきとちさい
さるまそをん世法うハきまよわ上下乃あわちまぐ
くハこもんとく乃はてんとくらん寄るふわとその

たゞひけるとせなせめてた我事ハうつ五ういを
たえつりとゝるものとなしたとへばもろくれ
あく縁ん知ん為ふハきやうしやのうめかでたなわ
りのりきゝゞうたんとおもろくせんちんのせいを
そろえく一ねんもえわろくるすあのり道その時燃金
法まふ世いをひわとされてまげかくれぬたうわと
いんとも何ても法道ハすき所をえてハおんなふの
やうらむうんをわとこんとするまでも世んえんれは
うきまりしこられハ法のよまふ縁んれ欲知識ひ
う世て花ぬれえやらみれあふしとなわてその志ゝは
わこわてふとさこひしやうしをうく法事なし

ゆうふもくによらいのきんくいをさゝちて後世
を孫りふへ一一えやうハ一まししろきの知とるわ
あり一り色すくもいるう世り和りふへつうす
かやうのすをぬくえんする知とをとゞちまや
聖人ア不称
弟四ろりかくれきやうこうを深見て佛にふる
アーとハちまぶつそみふ六はらつとわとふひ
たゞひてしやうわくふわ縁ふ六えらくつとサハ
一ゆはたんりうみつふ世れすなわ二りハ
志うもうゞつういをたゞろ事なわ三りは
きんえいもらみゆ 抱をりんゆんしてあさ畝地

とうをも思な殺して人のいのちをたむへきさ事を殺かみ
おりひとるべきなり　世中はひつきやうこのゆめ
えやうおんとかたくすゆきと五みせんちうこつ
んをこえてふかちて仏をともむへ戒ならび六
ふはそんにやりうこつハちゑをえつて極よひれ
しゆトやうをすゝめてらくらくへみちひくへし代
たをありせて六度きやうすとかなわされ公志やう
しやう仙人ハもとにあれ菓をくひて子をうそ
それハうひこのすゐりますてはそのむすこ太子
ハたんとくせん中ゆきかせうそん志やハけいそく
さんりこをわてそおこふひ南ひゆる志ゆのそ

ふら凡大みほうつうきをと我をたうそえてわとけ
をほくわきやうをとこそふをほこ水をむは如來と
みふ仏だうなる八葉きやうなわされハうそふにん
ひゆこ金のふ河しあとうまんをけ許うけるなら
むし佛よそふを葉わしゆへ南わみひとふふ
れ後よ頼たうれうへ乃くつまる所とつちとぬれ
てほくろふる人九十一こうあくのをまねうまて
めまちやうしやの子とむまれ我みほとを乃そく法
をけうるにそくをきしふかしゆへよみういハ
かなふのかとけよふかでゆうやう如來となる
へしときさ金のふなわてんちくもんだんわり給ふ

にんある人のそれの佛道をしゆぎやうせざらむ
のわぶべざれ八大國のみにとは八万四千のたう
とたて塔ハ二千九百のたうをつくりたまふきやうき
菩薩ハ四十九ゐんを立たまへハいはゞのうすそれ
も心のひんうるをほとめおさめひてわたうふ
のふわずふへし
第五ろしやうとまうふしやうきんといふくわん
をれうしてかとけよなる也とやハかろく乃ぶの
おきつハ衆生をはられき給ぞきのく難を逃給ふ
それ心あまるのきやうまなきさわしやくそんハ五
百浅くうんやくにようちいハ十二乃くりんあるき

ハ四十八くわんふらんかさつハすくハれんきのく
わまるまゐしやうをあかれんたまひてほくりんと
おかしめしてちうひたまふかんさしなちされハん
わうん人を難とれこうして佛道をミやうじゆしそ
うえんの衆生をみちびかむきんの獄人とそふ羅う
へるなわ大志やうおん浅ん小ほおハいうらしの衆
まのもしくハんはうりひのことしわのうし
乃く衆あれらもくりんのうしうひなけきい庭と
めくほすなしをやくきやうこうをほうてまふ
しやうのくりんをおこしてしやうと小まふすく
さいしゆやうをみちびきたまふへきなわざると

ゑつてふくんおきつハくわんかりんよくみやう
しゆうじじんぢよ一さいしよしやうげめんけん
ひふつあみだそくとくわうじやうあんらくせつ
いふこゝろハねかはくハ孫りくハ王飛るまんらめり此時う
のそ梅ハさとくく一さいれしやうけをのそひて
みだによらいをみたてまつりてすなはちあんらく國へ
わうじやうすることをえしめたまへとなりまた
かんしゆハくわんがみやうじゆうじじんぢよ
しやうけめんけんあみだわうじやうあんらくこく
とあり　これもまへとおなじ心なり
みいそくせいくわんふしきむりやうしゆちやう

ざいしゆじやうみなしやうねんらくらく
とめて後ハあみだせいしくわんおんとみえきたる
いなしうくちうざいしゆじやうを極楽ごくらく
へうふしやうずとなり　このみちハかなふまじき孫うひ
さんうるさいはおほく得わぬ
たゞ人へしらす
おほくのふかくのほどとの袖との
そのたくさんとうまでまいりたし
きよりえれもとすけ
激此野法激れめし歩をある時とに
志つれ孫ありしつしてもりる

中原の時致

梅がゝをさくらの花にゝほはせて
柳のえだにさかせてもがな

みてんぢくのはしのく王のむすめせうまんぶにん
ハかたちいつくしくちゑみちたかくして人がら
みゆへきやうだいしたう事もおんあひすてがたく
てひらのれうふはかくしをおほうふことつ
佛をせうしんまはりてせけんがうをさせまゐらすへきこと
おもせられハ國中のきせんみなかうをちやうもん
せんずとよろこびけるにこのむすめ小袖とれ
そのへにはたましき法事ぞおりしけれハこの

すをかなしみてかうけの世間法をきうんといふ
くわんおうしたまへハ佛法をされこおかしめしての
法のうちへひかわをそふらたまへはこのひかり
ふあるわうてせうまんぶにんのうこちたんぶにんに
なわらてふちてめのうこもひすいハてりくろえ
かれハ大王よろこひ彼もよく佛法をちやうもん
ありさまひめかれもくわんまされぬさきゆへなる
みせんしやくひくハすまわふそのゝちをしてむま
ふかびしうふうさうてそむまれしといふ縁を
うそけ連ハうのひなくそのときそむまれたまふ
法蓮ハ少納言公經ハこゝおやうして河内の國へ下

けるは一切だりなこんまうきんとおりひたちて
又あわききれハみるきなりあわぶりだんれうちを
みまハよく志らめするみこ切わとわて六るそれ
もんかりしくさやもんこうけいうやまほてや一
たりらんつうりれくりんあわとりくこもちり勝く
しそくやうをとけす孫うくハらい世りり南國れ
うく志となわてりのくやうをとけきめ強くと参
かわ氏しやもんれふめわれもんしとみまハわり
名家わと日中しなわを対むしの事とさられて
くやうをときられかわ恵もくハん王きの中へなれ
きさむし三見やう法阿まといふその方わ志るく

えやう法うを始てむしれすをかられていもく
ま訳むりし一人れまくみをばくくてひそうふし
らふりまをさしける母あやきてわまをとう六ひ
しうもわ狼くのらかきをとりくちんずきちう
きと一切をふうりをしやうくせくり於ひる
なわ以ま羅りん乃くまをめわこいくともりし
よわ阿れうしまそりまをと残すやうあるくれん
あわとそあうわるる何るりも一称ん新こすと了济
のくりんハえやうくせこみたこすあわされハ阿
えさ如来をたのこなりハ志うんいれわて而ずわ
らいうふ志経りんるすうさのひまへしりすと残記

たとへハ一日につきなしちかくハ東大寺れとく
こうとめしん大せんにやくやうすへきくりん
ともさきんしせ備りいのちをりうまろはうさん波
まふくうあわうへされてくやうとけくかとなく
わうドやうをうまけうされまきさんはさふさつけ
まうふもんあわらみうく法はちんまやハない一乃
きやうなわらのきやうとけちえんするそのハこうの
きやうをもしいんれかあらんをちとせくほ
とう無わをしほえん波わうのをしへたまゐる經
しんなれとそ河海孫く詔とやき
第六うごゆしやうとさんをしてほとけかなりそ

般若第一教此經結縁者雖有重業障必當得解脱

一会の執とおこしすべし

とりハめんうんいまちやうとうくほうのちとさんげ
れおうまあひしゆへふかきしやくまんじのかん
らくちうにきやうほんひらきてのたまはく人ハ一日
一夜をふるあひだハ八万四千悩思ひあかいちん
や孫んくにおとす所れおりひれのすむつみやうむ
ゆんなわられみな三途乃ごうなとい無わ所ちん
や一しやういとこうをや法んとあいくりん法師
う七たんのしきふくりしきまるせわちんちくうん
きやうのはざいけれそのいすくがんなふのいんを
まねくちうるをとりくれさんけ波まハあらふほうん
なふみふめゆしてかざいの花むらくさんけまれハ。

大悲んけうをみるさんけすれハむうよふいて派
百ぢやうれ石ふれともふ〇いしさふ派ぬまでも大
うい川しき派むすなし派ゝは百ぢやうれ石の
らしさんけハ舟れこゝろやくわつく乃こゝろ
志やうを派せをしてしやうじれくかいをわたすへ
きなわされハふくんかさつハう派うむ派う派さん
きを被しへたてへわよくくら派へきるへし
まり志きさうれ派せけとゃしハむしちやうしよわ
派くわしばゝとらをそちくやゑみそなひ派てい
きうしてあ派いもおんそんうむうひ執ハくん
ぶやうふむ派ひそさんけすれなれみ大きやう小は

ちし人派ゝを派くまそく世いすらしきつゝなわと
いんれはよくみうちやうはといふ分わ志うまれきを
ち被さんくしてんをさんをせさ派ハいさつく事
なわんれつゝハさんをすまとも一心まさんけして
こゝろしやうを派被かしたまふへしみむ派うれさん
けといふハ一さいれごゝろしやうハみふまふばうふ
星志やうす被ともをないといふそのなしうれを
理れさんけとい派わたとんハちよ世れやみハめくろ
くれともさんけのこゝろんの志ずくとりまぬまハ千
被んのやまハられぬへしこゝろしやうれたきハ千
罪うつみろれをしろわのさんけれ火を派き

ぬきハもとくくやけうせぬたとひ髪こうれくも
きりをあつくれさんけの身ふけし頭こうれ雲
おわみおりまで法性乃そう体きうかなかんなふ
れつ趣粟ふりけまらも仏世け乃出日出るれもする
もちさしう世ぬ氏んを絵乃んきやうりこ夜うふ
きさたまふみかくじゅ法師かうとみも
いのちをもほみなをもつ趣みりたとへきわ
きさしハともにやきえんとすらん
されハ秘宝乃八大ま
もく語よわむはひを託ける霊の称ハ
おりひとく月すのとらさわけま

さんけとやハしゃうく世くよ律をおめうほとを
もちあくこうおんおふにをぢおそあくをいふなわ
ひとの乃世うことを申しへ下てんちくふあさ人あわ
わろくれちうるともとめんうきめるり五百人民
ともをくして財にゆう世て船をいう大海を
わつわけるふいのつくともなくいおあ跡くりしうれ
おとおりくしてにわくハ三んをふ炎まう三こもも
ひのきをそふらふるその船ともへくいてくなん
あるま秘よわおそ語しきりのえうるやといふ五
百人ハそのものくんと海とりしきもをうしおひ
とふみれうとうしる語ひかすてもあわけるゆまー

人此ゑのいのちくらんちよわおそ夜しき物あわ
とりハみのうけるのいのちくりのなる物そきう
海かりしとりふ時まふんちらも五千万あつまる
よわな故おそろしきあしうら世つれ中へやまを
つまてゆうんとする悪こう於んなふ此んいくたく
すくれすやといひそれハけしやうのものきく
となわてうみに生滓ぬすみ魚のま此人のおりひ
をふしあくこう於んふふうれうまこうしやうに
いちふるうゆんなわみ世間のうし乃さん老といふ
ハ正法をもつて國をおさめ六斎日ふ物此いのち
をた殺さんちく毋まけうやうすかをかなわ正法を

もつて國をおさむるといふハまつりごとし
かう孫ハてんか見ふる天下みな迷ぬまてもろうん
のな王此あわれみをれふかけきするかいちさいごう成ま
まの王を於しき八七世後世此てうまなわむし
おもやをあわれみのふあのまけるをもて此し
ふるふかわてこうんもやう此いのちのひさわきまるさ
やゑやちやうしや八ゑつまわうる池みつ於ほめ於
う殊此を死く大うふちふちけるゆん於ち去此らく
生ありきふれハ八まん大菩薩の悟もくちんくう
魚るうごういうくゑいじし此御時おほく法せい
しやうをつるしたまひしそれくんほいをほくめん

うなめまうしのとほりあまくあまさひをまつりてうひ
よりて八月十五日にちゝふちたまふところしやう志ほ
まつりとはこれなわいるるとなつとかさはされ
はちいさねりさちとうけたまそのふかきいのち
とをしむるすハ太山よりをもうひちく海い
うむまふとりへ孔子を称りふ事ハみんうへ
まわ梅さわ、その銘を上流さむすしそよく
く随それとまふへし、その礼いのちをたすけ
ぬ遣ハうめすめふいるまてをもおんとさわて
かふそれ様のせうりむくふふかこれほと乃事ハ
明すある志怜乃めなきもさわるすふ孔九志わ

個人

ふりうきうぬなわされハおゝけもちうゆ世川けおん
とそを一よひのときたるのしす遣ともかうまく
の人まうふハよく〳〵志や卜やうれ昆ふまきりた
わさきんのふあなわ又ちりけうやうしく
佛さりなわ尼とやハきんけの中乃たい一なわ
ちるむわん乃たりきるすハしゆみせんのとし毋
れとくの数みきおとをうハみにふわ志ろきかき
ハ父れわんけうきやくハとうれとくあわ人むまよき
てらくれちとのむ事百八十石なわ水中のかめ
れ子とそれるまなこ志もよのけるる乃子と思ひてなく
ふ念いつまをもわんあひぬ数しいりんやにんまんに

重況倡言

人倫

おひてをや我身より急て子をおもふためしかこ
へしうんれかうりと捜れりふうとうりふほと
にかうそれかるに石大夫と以ふつてこのあわうまと
うちくとらわこそめて汝り子せ義大ちやと我うこへ
よりはいのちとふへしといひそれけりふう
ハ天下をたもつましき人あわとして子ふはうて
おうそりぼう人よま飛ハいのちをすほるこりの
ときてほうきまおちうるまでうせまされハ心
地くうんきやう中は世人ぬ子ばうちょ飛たさいこ
律ちやうちぬく室らむまふうのんハよは人をこ
のふあかりつくれほととつくわてこ途におちて

あつくるしみとうくほうとの人飛へわみかう縁
むすめれ国に次めといふをのあわおもりしき女を
もちうわけるがこくしれ京のかわ乃うもしてよる
へきふそあわけるうり女をすてこのやうん事を
かなしみそきんきれようひてのむらしとおもひ
てるくと山中まくしてゆきてう源さんとる
時大にいはりふきれとりの次めおち入けるとむと
よりを我くひそなくほハそくなわらのぢうくり
おつるをまいうひて我いのちほうせんするをゐ
おそまするきとなることをひるあけしへまわなく
そおれ山隠されあとにんうし乃何さしぬおや乃

さめけうやうせのらん人あらんやむるをといへ於
夫人ハよのこゝろにまふけまてゑふやうれんさし略く
まで三世のくるしみにせめらるゝなはされハ佛は
父母をうやうれさめになるまてんかのおわきう
おんきやうをときたまひしなりみごくらくにまふ
こやうちるしゆしやうかむつひてぬりんゑん王
乃いしく父をうけうやうれゑふしやうちやう
かしのまふしやうしとふなされハちくちくま
ゑふやうのぬくしもちをけふあるへきまちれ
まそたるへしされ世間さしのさんけれ大王なれ
仁明天皇ハ一年かのひさのことさんきおんと

てうしれくれふかゐるの三千仏法になる鐵かてい谷
ふたしずらん心をおかくれうさふもよろきわ
平の宗盛わ
あるむのうしも浮く死ハ浮色わかれ
浮之ものこゝろのきくやうしめらん
源なる浮ふ
すさめしも猶もあふうて分れうらよ
三世乃ふとけれなりうしきりふ
ひとりも猶くれせときやうすべしとは八志よ
ぶつハみふせをみとうして正おくなお終ふふれを
たれとみつといふまうじゆおなつハをゝをきやう

すゝ人ハ月れりしめて出るかまく法人よふや
悔かみくとのた守ひろゝみは花纏中は國城妻子郷
まくすいなふちんにくしぬうくふしやくおかんやう
とのへたまふ氏んいは法乃さめ中は國ぶ法まよやこ
笑まずいりふふおよび決五ない六ちんをよひ給を
もふし悔されときさたまふ法皇ハ志ひ大わうハ
えとにゝりゝて法ゝつゝれちくむゝをふゝり
あさへさつたまうしハうんさゝさゝよ教ゐとほと
うし世かきんとうしハむよやうのもんみ命をりへ
しやゝ里れか堂ちやれまゝゐこをぬきてこゝろそんりゝ
もんりしちゝ世たまふみ阿志や世ゝふ佛をせうん

きゐゝ世くせいかうちやうもんはゐて夜よいゝとて
ゐさけは心かへりあわける時あちやせ王くふうゝわき
おんしふやうちやまそひとと中したかひけるふわ心
念ん女まうく二心んしちゐゐとあふゝにあんて
ありしなれハ諸ゐの次みふきゝてられのさにとけ
乃法ふめふ昭なわ三十一こうとつくゐゝけるなる
へしたてちゝみとうゐうによらいよそてさ法老諸
ひとこれとちまれ可とうむわ念ん女が一とうやふ
中しなわ後世ハ中ふおよりす躍ざいにとくとえ給
ますおわしてんちくふ忘しあわけるゝたちくに
えししてぬけるよさいしたちぬるまうち名れ社

かをらは男なりかをはとふのみに人なりけりのをかわて
つゝしみ月日を過しけるほどに十二歳と云ふ
まことに稀世無双にてかをはまみちのかたちになりけれ
ありさまかほどけりまくとおさんとそこの事を
すゝむるひとわありしおりしひけるは此金を
てかをはをさそこえんしやうつたんのたりしまて
こうあらんは遠佛に弟子せくのちれよのたゝしゝと
おさんと思ひて此金をみなちらしけくいさにかへす
けるさいしよろしひなにをうちもちてかへりける
むさし人ハあわれましにかゝりけると云て此ほと
たのミ給ふるひをなくいふ海へともゆと云そのま

なわぬとなけくと大なはは此すきうしめしてんれ
大なるそのあら涙のなさしてるへしとて座をく
まんしをくさされけるにうんしやうのましやうかく
れよしし後世れうつゝへおりひ座を給ふへしされ
ハ佛れ地をさへさんしきるすハくハこまそ
ゆとわりしても人にかとうし給ひしゆへなたうしと
そのてくハうそやうものうこうハゆとかりしして
そうのうの人のはなとすまたまふかいふせきその
うこ無をあやしきるこのうしき乃我はうとすまを
よへとハひそれハ雅をやぶりしそひそのふは
うとすまうふをてはす人母ふいひそとおれせ

けまりハこのよのあしゆくかう乃何うすてよるとん
小やうわ絵ふふきゝ地とてうきけすやうにう世よ
きわされハうれなそけ包んけ絵てりのきさ地乃法
心さしれ経をもうわたまふなわされハ仏ふせれく
とくをとき給ふれ主子せうハを地わあくうふあし
そうの菓子の木とみえけいくすむつやうれ河
うわあの道入大うハまそあるれみつうしとの水と
ハさるとも女世乃くとくハきさ傍くすんうるすと
待わるる傍道ハかうすうんど由といふ本流ニハ登し
すわをちいさきれとも一粒よ百ちやうおひのうわ
てそのけに五百ゆれく深まとかくすふせれくとく

たかく苦こともうしの事なりけれかならす地獄
おそれ天ふるゝすけこふ猶ほされハぢごくすそごく
そつ獄人りむりひなをくを免ぬをすしてあら
くのこきやうへはかくわるうといへハひんくむ
ふくみしてたりとうりわしゆへにもうしれ
せんざんもふさいといへハかしやいうまはまうあく
を見ひらきそをけしく我こゝろをあけていたくいそ
つうよ我へりきれるをふ一之さ佛ふなうん
そしまつしきによ深へつゝ次むなしく苦う
なうふく水一むすひ僧ふくやうせんすはたらう
ふきみを深へさきりとそれうけるを解く一花一る

なされ仏法僧にちかうして佛になる語ふへし
者八まくりんねんをおこして如仏すと申八読法
ハみふかくりんねんによるかゆへうくらん称んを
もちひたふへわたくんれ国王ぬらんかなかわうるひとれ
きらやうれうちふぬふうりんまれなりのふんとめ
くらし天下をおさむるかことしりしらぬ人まきもと
れいおわのうちりぬふりすおくれこくらく
しゃうとはいふりんすとくまんなるなわおとけ
たとへを私くをしへたるへる事おわをふ里ハ
おつくむまへとものとなすわぬまでもうり縁事ふ
しうみ乃あえたのくたてれきつまわぬまで八もと

のうみとなるかしらくちんによ䕃にうもみかくの
ふうしおゑしりうんゑまでともかいちんとおとせん
ぶつなうれりるまで熟心とふせ八なちまちらくえり
色んすくいん欲ふれ人八彼よのれやこりまでかうし
おほ人へやまひ大すりますそにきふんとるわおわ
国とるるさてこ二人れ子あわ味うしいひつうひふれ
ハきてあ色す出けるか日くれてらくくなわきんご
兄き孫てふ法かなれれみかけるふ入てりしみぬ
ひうれれ子ハろとばくしてあとよわたとわかるるか
うれを日くれておそ法しちは味なふに入られハ
りしめ入するみ八愚の歩わやままをらうりんとする

にやとおのゝこ一人乃子ハ給られ也中ゝ小おふみて
また身をめまんとすほとおりひたらひふくかれし
とて二人ともよろかくまてさらひけるかとより
夜あけてみまゐハきやうないなれしやうじれやえ
ふ悔よひぬ身ハむえやうれおふなるに菩提法行
つきはなきぬまてしんみよ志はらう一なるとえる
なれ又くうくわんとやハえよおうハみふくふなれ
くわんしてぢやくとふすまをせさ承なれあと
くうんす身いきしのひさいゑ孫をさしたる草
いのちを法んするよ江れおとまに津ふうさ承ふ
しやうあふりのハかふすし法しやくそん いまさ

さんぞんれたふわのまゐらせとみのたきつさうほ
志ゝ来る大かん永代五すいの月日あへわまん法ハ
みふこれくうなわとくうんそれハ済とをなしく
とくもろしトやうともろし諸あくをなし成くわん
いふわねまはせしこやうにし乃津こあとくゝ
きやうせてはのよおぐさい乃きしよいさほなれみ
ふしやうくわんとやハ身も人もうのあえりしめ
よわおりるまてふしやうなれたとへをあるりるさ
なるうめかうんをりまゐるがことし大うい世くと
かしてあらふれきよくなる事あふへるす一度
れあことまよきん縁しうゝすとのゝれしうさちも

のへにすてしかはそれかくきうりてしろき
ほねハあさくなりあさきにひるをくろくなんしせ
むしうさめふさかまふちやうらんしてくさき
うちくらくふかひハいぬハちとかへつて東西にちりしき
ふしすは眼をくらわて南にありとふはなふちもき
うちもとにくちてそれ骨のこりまわされ人か芒
をあひしてきをひよこをすひむかしきゆうをとぶ
せんやうくん孫んあすときかくしやうしれさい
しやうをめりす体あわられとしやうくりんとはや
なわちうひ照こうをふすとりふとも色ゆてきん
となるはらのくもん念にす体なわかんあふらくそ
しいしやうしうく孫そんなわかうしとそってちしや
此はく体つきハ大ふ我とも地獄におちすぞしや此
体く体体きハかふ我花ぢらくにおつると弘法大師
おおせさるふわされハ人々あわれ人間くわんねん
をなして孫そんにいふせたまふへし
第九にせんちしきにあひて佛よふるへしとハ
一しやうのひ此ひさ十悪五ぎやくをなせ体人臨
終のきさ可あきうら世間次れく体まとめ体
きの人に遇すといへ此善知識しきのをしへにより
十八十念りしハ一ねん乃くわきをむつふやうの
つえあとをくくあけしてひ此く体悔ハ大ひやく五

しやとなれハつまれ仏土へなれどももんのまよいう
せうん路なれされハおけきやうみもせん地しき
ちやせ丈りん忌んとのへきよふみえさ如来ハふさ
いらんうくれむちやう称んまふさ中しおしはう
らいうん一れすゝめふよわくうきふ仏に往う人
なれ路をふつたうときをめう忌ん花えんれ諸生を
もらさんをんひたおりんとの浄せハくうん海らく
おりしませハまつおうまん称んまをえさ八一けう
をたの念仏ふやきさあうと浄土八後一系れのん字治所
よわ読経れ中ふそ志るしまゐうせよとおおせ
られふおけるよ　花生ぢやうとしやうみだくうん

至き詞にじやうぼんらく地ごくちう悪人む他そう
思んゆいせうみさとくしやう極楽これをこたう法
かくしやうたちあつまりてこれもんをまきおきて
そうそまのられける所ことふわまうさよくせまつ
ぶいまむま教てくまこまんくれ読ぶつをもすて
ら教まんゆうせんせうしちやうじしよわ六道ちん
りんしをはてん乃くをうく所方をこのほう思ん
あふそされわることを称んせハごくらくへむかひ
とらのひたまふ法しひをいかなる部とうこのそ
東まて所へまきちよまつれ浄土せハくりんゆうつまも
相ろつまし海さ称わうわゆきえさ乃くれんふすき

猶ふへしすされハ阿闍世王ハちゝをころし
たすけしともきさき大臣ハをしへにしたかふやう
せん乃ちやうしゆにつけなれ猶死後仏にまかふ
ふたうちくれうんしゆ本子のうき事ありあひを
出家をしとはなさけハきんちしきよある人なれ
とらえおかせしき達ける我らともかやうなるすあれ源
のうつなうハ阿まれふ惜しふかくて仏法のうやう
しとまするすきんらん法眼とゆう子れあふしかえれ
またやくしおわ志らん此僧都それ有の座主なりを
のさらひて此国をうろ乃家ふかけて生死むしやう
乃物ふりは志たまひてなれハまんちうきをけつをを

きこて座つくたんおうし法師ふなわてなつうひの
ふうら三百もとゝふちおほくれ阿ここも座きすこゝ
あゆく世間ニやうしとくふめて伝を阿うめ本わする
これを後あとれせんちし来れあへる人とゆなる
みみふものとれのもふうう深りしき法まをもちらわ
くふり二三月のほとたちまへゆくすあわけまへハ
座つくう色深へきさらしいひのさらひて猶なくう色
またされけくふ此門にうちてふきぬうわ何事くく
とえいは前う世猶ひてうゝ以まともへ躰へなくわ
まれう世めうとかふとききて法をききゆくやう
まて阿しれたちうもおふ躰ともうまよわ躰道に

ゆきてみれはふかきやまにちかき法華ふかくありあま志き
くしらをいぬれはつくつくぬをうて念ふつせぬ
へをかなしきうとうともんをよむかく法師に
なりてなくなくそたちにける
あはれなりつるかまはなかれあふすを
なとかはれし世とちきりつらん
かくてなかくふつたをと志つめさやう志をわ又大にれ
さうさきの書にちかきまて法師になれわりつう
海のわたる後まてのおれてつすてて母のさあみに八
かうとこなひてせいせうのんとしやうしくせつ
なうさのへまうふめいるり日のひしみ出るを

えそハもろのこきやうにあふるすとわきて秋きれ月
れあしりつるぬのんとえそハ上人他に国にあは
るうとおりひいそくよしとのまし〳〵とききく都とあり
りるくしはひうさくや思ひふん流ハくは海のうち
よりかなとなりて出にそのもはかなされたさより
なくゆひとなりていくとすそのもあかうまきこれ五百
人はまわそあわけるかやうふうきめとみなのしき
悲しきふあふそのとハれたまひけるをやくをん
ちしきふあひて弁りれわうき時はとありしして
ふとけるにかわ終るへし

おすにまんしゆうに悪念をとゞめて佛身なるべし
とあれハうらひん竹るの記よすハ八十にをよふまで
にんにくしやう志んをそういをたもつといふとも
まんじゆうは以語をたゞして心を一称んれ妄念
おこせバかならず又しゆにまん志すべききたなあふ
ちやうちやのたくらをおしむゆへり大ぢやと
ふりをとこのうちをとるすゞ又なんふ三のしハ
むかしの天井に百くらんのせにをかくしをき死さる
は思いらしきる一称んすてぬやうなかりたんふみの
色大臣の由あまた見えて大我院坊にを小百貫を記する
うまくしむ事ももあわけるか又まんしゆうにおちし

いうじゆうるゆへにけやのおうとりけてはうさうしく
得るなわいそきうのせにを永く三おうとくやうし
経ふべしとなわふうきにおりひうのてんこやう
をみまたハせにれうんみちいさ記くち年はあわ大阪
なまきをかしうのまうくまそ法花経をよきて
くやうし経んいふ妻小氏くわきまそとくふ
志るるうしとのひをのちハみえさわりされハ仏
れおかしへおも百ねんくとくでんおんをふしても
まんしゆうに悪けんがをあれハ地獄よおつるす
なちまちふわ百年ぼくぼつこもつまんさゆうれ一
念がて悪ごうあとくくきとてかしけがなるす

はうしうひあふへしうすつまに乃こんちやう西山ん
とんうしこのてほとけを称ん」したまふへし
第十一小法花きやうをしゆきやうしてほとけう
なりやしとゆしハ三世の諸佛しゆつ世のほんくハい
一さい衆生成佛法らきなうハ法きやうなりされハ
このきやうをうけきくやうしうるうこを市まてうひ
まゆるる女人さんめいとのやミをりまぬすま乃
こうをりゆるけちえん山はぢうくれしりのかきゆる
なりせ二世三法花ぞハ一字ときたまふわうわう
船をゆるうまうく子れもくふあ魚ふかこうくよ
ふあミてりやくじゆしとくしゆしまくおとせよ

なりたまふへし一しんかいきやう世のちやう菩薩
とり魚わるくたもちおこなひてうふしやうの利を
うけたまふへし佛とくりんきし神もすいき
ゐたまふなかのむしふえなきうて國にかゝし
ましてあふうみれおふわをうはミたまふかみちれ
かさわか五百九かきれあつまりてくうしらかわは
よしとなま死ぬふわほられてたまひそうけきやう
一くうんくをたまへいかきらやうしんしせうあひ
のかこみとおりしれうこまるきはかさつ乃ゆめみ
五百九夫人うみくふうかきつとおりつこけるかしよ
あやらてゆつなる人うらくひ孫人ハ夫人こうん

でゆくわきてハ志ゝ国ふ百年こうれはひとと世に
えんへうさきくるしみをうけるしぎきどもなわ
志のうさつのかけきやうよき給ひしとちやうしん
志ふわしゆんふみる世間里てんるむまきる
なかい海よわのちハあくなうへの海は本あふへ
うるすいよくぶつたうと称んすやしそそやけるみ
後の世ハやにおよひすくりんかくよわ子ちハ是
海いえんそふ乃ほむほあとすて給ひて三条ののん
乃ほむこふなわ給ふう法そのくけれやまひ大事
すなわたをへはらんえやゆはちんよ緒郷ゑやう
そんあ志やゝおんやうしすハうゑ乃みつか

あ海のよしありなとあらてこゑをふそちうこと浮
くしかれれ志係しなくてすそれひさいよき給ふ
を揃通れ御しちておむる北関白乃ちぶ入の事給て
えうしく法花経れドゆかやうおんをうこ一まい程
二三海んよきたまうひてうかるう承かをあてゝふさ
たまへハもとれ法志うとく海い歌亘わうけれ給を
つまゝも子法いと殺しくかなしけるもわするふも
わきさけうなくなわてのち我むほとすてたよわなく
物をおもり世給ふかうしめしけまゝハうすけでゝく
おりへれかけきやうれうさうわまわて此度ハまう
う海ほなわとそれたをひけるを謝もとれかれきん

かへにせうへ車をさかりせく氏よりいせ中さをたれひ
なれいまんあひのゑちが氏世をかりといひをうる
草紙のけまそもこれほとゆさうりすあかりしめし
けるよとはなをるゝふむせひ座まひそおりしなると
やうくうりいさめまかりせはくはまのかふすけ
れをるまていりせたまうひぬよるみちれこれやすひも
ふ後にせす女ひけるりまなりとはまて家白殿下を
中ハそれはしみん「ふるき」恵つかやうきをおかし能
まわするハ法花経ふかりうてゑやうらうんうやう
だうをくさされをはうりふうりんやされハろんせ
あんおんゆのあるまりせうこはれごしやうせん

こよな後しさうひ「あふへし」正二位くせ三のんを（あくしふひとへりうれをたうきひめふへりされハ）
いろこし第物かよめは
みるさの脈くらうふ花れのをきてつましへ
いはうれさりうゆしとそて都のふ
友みうれきうすけ淡あそん
かさのふ和泉法のふ子のそこのりき
歌とれはうてもわさすとおもへは
「うをすくうのきやうとらんかりしたまりふへし」
第十二りとうをねんしせ極楽み生ふトやうようさ
まふへしゑそんれをうつわうしやうようもうよハ
五れいねんしねんをたてられふわ藤継菩薩をぶりさう

ともとむる人あれはことさらつくらくへまいきと
そし八たまへつわやくしハ八なさつとしてうくらく
へをくゐんとらのひたまふくりん抽んハわりつかん
しゆうことを念んしそれとをしへたまのふなわ
きつめこふられこよきやうこよきんゑさいみだと
く八万法蔵しやうけうれ中ありこのきくほくれ
うわとおめなまわけをりろくれかさつ佛のす終ふ
やうゆりふしてうちよくせまつなれの由しやう
とおもけまあしやへ参とふひなまわたなへしおもけ
のたれそく百八のまんしゆをつらぬきてほこされ
そやうかうとともあへよろそおわせけるなんすく

うきうひとなすへうきす数珠ハさいえうふむきうひて
らいきいしあふ時ハあみをあけてみやうくふと
となへおなし時ハまうなことふさきてあらくれおさつ
みやうをくらんしてしつふひれつきさるをけす
うしらくのちれよの心とあさとすへしあれをまろ
すあつまたとんハぬすむとにれりゆひ抽とのう
被しそまけりしまはうとよわをひ来るふさきに
大なるうはほわわきさる抽をぬきてまさら八をひま
ふぬす人をひほくへしきふうしわうわをはこうに
おかれてやふあんはらんと抽りふことくにのちれ
よ〔illegible〕そ〔illegible〕へしたとへはうとくなる人れ

子をいやしきものゝぬすみて行さまうくして
つりひけれハなにとなくしておやれもとへゆかりや
とおりふごとくにふさとひ孫のふてらくらくへ
みふしやうすへしぜんだうくわしやう(善導和尚)のちやう(定)
にいるまでましませハかならす如来現じて物がたり
をしへ給ひしわれしとゆえたうしやくぜんじ(道綽禅師)れ
つねにしやうすへき事をとひ給へハたとへを引く
樹へ給ふ木をきる時ははやくきのをとらせ
いふにかならんおもハつゝまるをわすれよ木をきは
かたのおとゆるう世に往生ハきはめて事なしみ
家にかり色法にうるまでをおりひてなま念之ぬるまる

おそくりをのなわされハおもひこゝろなくなりう
こゝろを孫しくらくを孫のふへしみ
極楽をねんするひとハ小人此のものとひけるる
みえるはまゝ一大事あるとて仏とねんしく
ぬけるうくらくを孫がりん人ハされもかくもうハ
あるゆほしきれそてんちくえんたん法するハ
ゆしにつきみしわりてうまもきやうこう(行業)をはなそ
ぶつうをしるる人おほくあるしされたこれらハ
念仏の劫みをわするる人ハ往生ハあとりまふるまし
一念れちしるまそわうしやう志るるくとやへし
ふぬきの国をとのこうまゝ源太まといふものあり

うたまんとて地より出けるかしこくれけれとすけれまハ人
さとれあふあよりしまゆきてみ道ハおかくの記と
あつまりて寺めて給ん方のこうをいとふ先なる
これハ何事とたるうとんハおとけふ孫ひと
やなわといふ佛法ハいろふるものとてひなれハ
おとふひける僧なとけとはされよりめしにこくら
くといふ國乃あふしまでおりしまくなわ孫みさ
といふうれふ後とあ庵てんうりけなれハいのち
のなれるらんかふうれあわ給てこくらくへせうん
たまふなるとそひけ道ハいさうてわ道をみしに
むうひゆんとてうくたふいとくふへくあゆくの

おうとむそひひたる人にふしきまおりひてそれあとを
たてさひ先後くわたれハうみ乃あとわふまつ法本れ
あわけるまのかわてかしにむかひてたてさわらう
ほふてみ道ハくちわせうまんきをひていきやう
くんしてそあわけるされハんうしれ如うけ道ハ一
孫んれくわきさまそをかあるすきとくあるへしされ
もふるき給ふもかくしう法くわされ十悪といふれ
な後いんせうす志体ふう乃雲あわとかうくまわを
すふちうし一念といふともふをうんおうすこそ
ひ乃うん海とのうくふたふとうきたかへわ佛道
ハ法んハ十悪れ論まをもろ引おふ事ハ風乃雲

しわとうぬよわをたやし一ほんの宗生たるもの
ふひたまふすハ大いのすうしきかうきをいたし
ハまならうし三いふなりけ恩五逆れそのさんみ
さのひくうん中はしきすいりんやうさとこのこま
一生のあひさしやうほんせんそのりをひてをや
こうにようらいくりんおんせいしとくし給まらい
おうりんせうし西方よりわたりれ九ほんまんたい
のこやうしゆ志うん小えてなてめふくふわくいう
ゑやうかく極くとしてナうれをくいとてうし
いきやううんくとして若来せんたんれみわひと
ふ泆くうんおん清蓮ざいをかさふけ給へいせ志

へきといふうしてひんよの世界ふきがくうるゐいれしゑ
ゑうふみちてすいきれなかうこめえずたりうれ
まちすゐとふわすでに伝れんふ志てさうひてしやう
じゆの中にきじりつきし海ゆれゐまもおんやうれ
たりうれ池ふいろわむつるやうれうの志こをえ八く
とくちゆは四色のきんけひうきそいろ清く乃光を
ちふち七ぢうれおうしゆゆはうかさねうのことなも
ふうん志んあふさんはうきせうちやくきんくごゆは
みめうきんがくとなうふのへびを孫うとうすつハき
いれ志うへをそうり勢のおみまてぶつだう妙もん
をと甚亜むし法ぞさんきてしは法しんをちきみ

みくにかまよりみしんくわんをしほんにんこ海のあくわ
ふかきまわすかせうゐにほりんして三世れ諸仏
とくやうじしせ世乃おんあよとえちひやうあん
あんとふふせうえんしやうときやう中は百千
くていふゆさこうとつくむつやう子くていふゆさ
とそわて一こ乃ちされうんうしむつやうれてあ
いうしておむたくこさまやうがうれあとくハ
おめくすへしうほとそのへられうふさふこやう
ようあうのすらくをあるすよ百千万のうのしこ
あかとうもすらくれうち乃一小はおよふへうすと
いわされハあやえのえさのりしそ中くま

さん事おわうなわくうとほんしてかうう
とめてえききやうとん家わ経ふへ豪なわんめふ人
乃うくらくを孫うひしし事うさみてゆしへし
りうふしてえちすれふりはとわなん
世とうまき藥うハすむうひもなし
ごくらくれりちすれそふれうへにしう
つ遊れわのあハをの海ほしけま
た大臣の孫さまうあめほ
花はみふほうぬかまもこん世まえ
ゆうしききのそりちすなわるわ
おやうう出偕かうわえてくふ世而方極楽世うい

こゝに如来らいかうりんせうしゆへ給ふ南無九ほん
まんざいしやうじやうゑいしゆうらいかう
りんせう志給へといふほどこそ夜をあけにけれ八
人みなふしおがまんとするところに僧も人に見きれていつ
くさへゆくゑもしらずうせにけり

110X
399
3